



女子栄養大学短期大学部非常勤講師  
資源と環境の教育を考える会『エコが見える学校』  
関東学院大学非常勤講師  
三信化工株式会社

## 海老原誠治

えびはら せいじ

佐賀大学物理学科卒業、佐賀県立有田窯業大学校・常勤講師を経る。

◎政府インターネットテレビ『徳光・木佐の知りたいニッポン～守りつなぎ広める日本の心 和食』で和食器の給食、出前授業の様子が放送されています。

# 北の生活、巡るニシン・ホッケ

お正月はいかがお過ごしだったでしょうか。筆者はお節担当で、少々ですが一応、数の子を入れます。数の子といえば「かつちゃん数の子、<sup>いしん</sup>鰯の子」「煮ても焼いても<sup>からべうた</sup>コーリッコリッ」という童歌を思い出します。この歌の由来はよくわからないのですが、調べてみると後半部分は「おしりをねらうはカッパの子」など、いろいろあるようです。数の子のような高級食材が童歌になるのも少し不思議な気がしますが、数の子・身欠きニシンなど、日本人にとってニシンは特殊な位置付けなのかもしれません。さて前回に引き続き、北海道編ですが、ニシンに始まりホッケへ至る旅路です。

## 石狩挽歌と、鰯供養と、

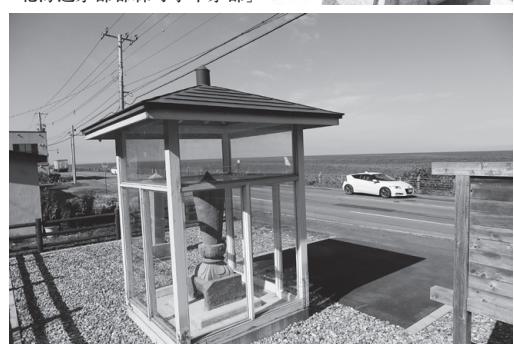
元をたどれば、出前授業とセミナーで札幌を訪れたことから始まります。地理からいえば石狩平野、流行歌「石狩挽歌」を連想するのは、年のせいでしょうか。なかにし礼作詞によりますが、北海道は小樽における自身の経験が基と聞きます。やん衆・刺し網・番屋・ニシン曇りなど、この詩に、ニシン漁の情景が垣間見られます。「ニシン御殿」という言葉がありますが、ニシン漁の網元は大変栄えたそうです。

ニシンは日本海側が主な漁場だったようですが、北海道の太平洋側の凹み、内浦湾

でもとれたようです。イカ飯で有名な森町の茅部地区では、江戸期の宝暦年間（1751～1764年）、ニシンの大豊漁が続きます。しかし当時は、日保ちさせる加工技術が遅れていたため、その多くが処理できずに放置されました。そのため宝暦7（1757）年、そのニシンを埋めて塚とし、その上に供養塔を建てて慰霊法要を行ったといいます（文化遺産オンライン@文化庁）。訪れる、「南無阿弥陀仏」と書かれた塔が、すぐ海沿いに湾を望み、佇みます（写真下）。



▼►海岸沿いに位置し、海を望む、茅部の鰯供養塔  
〔宝暦7（1757）年建立、  
北海道茅部郡森町字本茅部〕





◀▼海の見える高台にある、山海獵供養塔「山海漁獵群萌下種結縁為菩提也」の文字が刻まれている〔享保6（1721）年建立、法藏寺（北海道二海郡八雲町熊石根崎町）〕

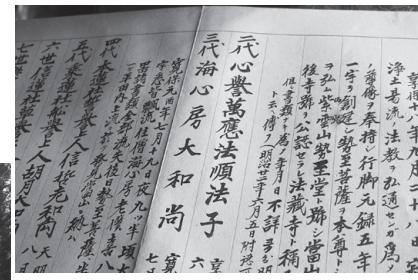


漁獲量が石高こくだかで表されるほど、米のとれなかつた北海道において、ニシンは特別な存在でした。江戸初期より北海道南部を主に和人地（アイヌ民族が居住する蝦夷地）に対して和人が定住する地域）に展開した松前藩では、家臣に対し給与としてニシンの漁業権を与えたほどです。江戸後期では、肥料であるイワシの干鰯ほしがが不足したため、代用とされたニシンの価値はさらに増します。このような背景から、ニシンの当て字は「ただの魚に非ず」あらに由来し「鮓」とも表されます（「熊石町史」）。

## ホッケ奇譚

森町、茅部の鯨供養塔へは、札幌より函館方面に向かいます。その途中、漁にまつわる道内最古の石塔があるとのことで、山を越えた反対側、日本海に面する熊石へ寄り道しました。

海岸線からすぐ高台にある法藏寺に、山海獵供養塔〔享保6（1721）年〕はありました。住職に伺うと、思わぬ由来が！ 江戸時代よりニシン漁が盛んであった熊石において、ある時、不漁が続きました。困った漁師が法藏寺の法順に相談し漁に出たところ、ニシンと違う魚が大いにとれ救われたとのこと。仏法の導きでとれたことにち



▲法藏寺の過去帳。二代目住職に、法順の文字が確認できる

なみ、その魚を法華＝ホッケと呼んだそうです。法藏寺の過去帳を見せていただくと、二代目住職に法順の名が確認できました。旧熊石町の町史を読むと、「享保5年4月、法順という念仏行者が訪れ、漁事について指導したところ、多くの魚がとれた。ニシンのほかの魚の名を知らなかつたので僧の名を取り法花＝ほっけと名づけ、翌6年、報恩感謝を込め供養塔を建立・法要を行つた」とあります。ホッケの由来はいくつもあり、古いことなので断定はできませんが、名の由来としてはかなり有力です。

## 表裏一体、大漁不漁

大漁への感謝の裏側には、不漁に対する恐れとつらさが付きまといます。米のとれなかつた江戸時代・北の地ではなおさらでしょう。恵みと厳しさ・畏れ、自然の表裏を見るようです。同じ土地に暮らしたアイヌでは、育てたクマを殺す際、神の国へ送る儀式イオマンテが知られ、道具を送る儀式まであったといいます。厳しさを知るほど、自然が近くに居るのかもしれません。万物の一つひとつが畏敬の対象である考え方を「アニミズム」といいますが、それが、供養塔や儀式などさまざまな形で伝え残る日本を、興味深く感じます。